

西表島では、琉球大学のワタナベ先生にお世話になった。西表島に長年住んでいて、マングローブだけでなく西表島についてとても詳しい。コロナ前は毎年お世話になっていたのが久しぶりにお会いできて嬉しい。台風で1日分プログラムが短くなったが、そんなことなんて忘れてしまうくらい色々な所に連れて行っては、我々に西表島の自然についてたくさん教えてくれた。大学の先生が付きっきりで案内してくれるなんて…超贅沢。

「マングローブ」は、Vol.1と28でも紹介したが、「海の森」と言われ、海水に適応した特殊な生態をもつ樹木たちを指す。今回は、ヤエヤマヒルギ、オヒルギ、メヒルギ、ヒルギダマシ、ニッパヤシの計5種類のマングローブ植物を間近で観察することができた。中でも、ニッパヤシは日本では西表島にしか自生しておらず、国の天然記念物に指定されている。年々数が減ってきてしまっているようだ。

マングローブといえば、やっぱり根っこがすごい。海に生えているので、波に流されないように根が発達していて、**タコ足状の支柱根**（ヤエヤマヒルギ）や**板状の板根**（メヒルギ）などになっていて面白い。見ている分には変な形で面白いのだが、マングローブ林を歩くとすると、とっても大変。根っこに足を取られて、つまずくし、泥に足がハマって靴が脱げそうになる。何度足をぶつけて擦りむいたことか…。ときには、**首まで海水に浸かって**マングローブの間を泳ぐ。もうみんなヘトヘト…かと思いきや、こんな経験なかなかできないから、アドレナリンが出っぱなしで大興奮だ。

ところで、マングローブ林は湿地に生えるという特性から、**環境問題の観点で注目されている**とワタナベ先生が教えてくれた。普通の植物の場合、落ちた葉や枝はバクテリアに分解され、植物の中の炭素（C）は二酸化炭素（CO₂）となって放出される。でも、マングローブ林は地面が水に覆われているのでバクテリアが呼吸できず、分解作用が働きにくい。だから落ち葉などは分解されずに泥の中に残っている（これを**泥炭(peat)**と呼ぶ）。もし開発が進んでマングローブ林が干上がったら、地中にたまった泥炭がすべて分解され、一気に大気中の二酸化炭素が増加してしまう。逆に、マングローブ林を守れば、二酸化炭素濃度を保てる。マングローブ林は、**いわば炭素の貯蔵庫**になっているわけだ。

東京にいと、遠い地の話であまりピンと来ないかもしれない。でも現に熱帯地域の開発は進んでいて、世界のマングローブ林は失われつつある。地球規模でみんなが考えなければならないテーマなのだと思う。



マングローブの花の蜜を舐めてみると甘かった。オヒルギは甘い蜜で鳥や虫を誘い、触れると花が開いて花粉が飛び仕組みになっているようだ。



「手を繋いで立ってみて」と突如渡辺先生から指示が。水深が左右で全然違うことが分かる。ここから何が言えるだろう？と議論が始まる。



国の天然記念物・ニッパヤシ。西表島が世界の分布の北限で、日本では西表島でしか見ることができない。



マングローブ植物の一種・ヤエヤマヒルギ

海の中に木が生えているというのは“常識”では考えられないのでとても不思議だ。ヤエヤマヒルギの根はタコ足状になっている。



オヒルギ林を歩く

オヒルギの根は膝根（しっこん）といって、根の一部が地上に出てきている。これは根が呼吸するための工夫で、呼吸根とも呼ばれるそう。とにかく、この膝根はつまずくから厄介！



マングローブ林を泳ぐ

足がつかなくなるほど水深がある場所でもマングローブが生えていることに驚く。葉っぱや花も水没していた。よくこんな場所で生き抜いてきたあ…。